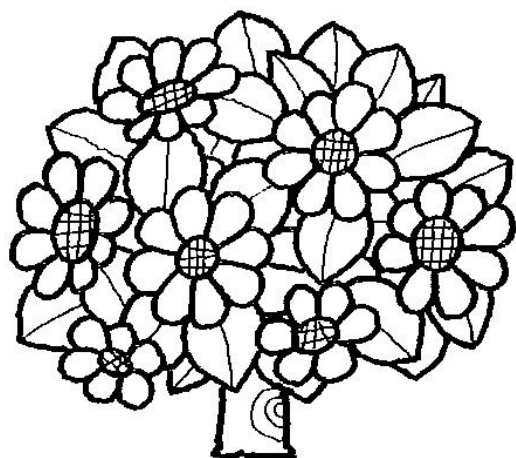


言葉の森の 勉強シリーズ



目 次

1. 幼児期からスタートできる作文学習
2. 国語の勉強法
3. 作文の勉強法
4. 基盤となるのは国語力
5. 読む力と書く力を育てる作文の勉強

大切なのは国語力

幼児期からスタートできる作文学習

才能は継続によって作られる

子供が小さいときは、あらゆる可能性にめぐまれているように感じられます。そして実際、子供たちはあらゆる可能性を持っています。しかし、それらの可能性のすべてが開花するわけではありません。いろいろな可能性の中から、いくつかを選びその選んだ可能性を継続して育てることによって、才能は開花します。

心理学者である波多野誼余氏は、その著書「知的好奇心（中公新書）」の中で、時間をかけて習得したものがその人の才能になるということを述べています。

しかし、人生の時間は限られています。どの分野に自分の才能を伸ばすことが自分を生かす道になるかという大きな方向をまず考える必要があります。

現在は、学習環境が整っているために、子供のうちから、英語もピアノもボールも公文も何でもやっておかないと人に後れをとるような錯覚に陥りがちです。しかし、幅広い能力を育てる前に、まず第一にすることは、いちばん大事なものを少なくとも一つはしっかり継続する覚悟で取り組むことです。

六歳児からのスタートで基礎作り

六歳での小学校入学には、それなりの背景があります。ちょうどこの時期に、子供には学習を身につける力が急速に備わってきます。小学校低学年のうちは、のびのびと遊ぶことが大事だという考えがありますが、同時に小学校低学年のときにこそ、のびのびと学習する習慣をつけておく必要があります。

六歳のときに身につけた学習習慣は、その後の成長の土台になります。逆に、小学校の初期に正しい学習習慣を身につけないと、学年が上がるにつれてそのような学習習慣を身につけることは難しくなります。

しかし、学習習慣を身につけるとは、問題集を解く時間を作ることだけではなくではありません。学校や塾での勉強と同じようなことをするよりも、日常生活の中での読み書きの習慣を確立しておくことがこの時期には最も大切なことなのです。

勉強にも役立ち、心の成長にも役立つ習い事

限られた時間の中で生活する子供たちにとって大事なことは、生涯につながる長い展望で現在の習い事を考えることです。

その点で、作文は、理想的な習い事の一つです。作文の学習をすることによって、次のような習慣が身につきます。

まず第一は、作文を通して親子の対話が増えるということです。小学生の課題では、「たまご焼きを作ったこと」「ひとりで電車やバスに乗ったこと」「ないしょの話」「お父さんの子供のころの遊び」などの課題があります。こういう課題に取り組むと、自然に親子で対話をする機会が増えます。小さい子供にとって、家族で対話することは心と頭脳の成長にとって欠かすことのできないものです。

第二は、音読の自習をすることによって、難しい文章を読む習慣がつくということです。言葉の森の長文音読は5分程度でできる簡単な自習ですが、それぞれの長文にはその学年の子供にとっては難しい文章を載せています。こういう難しい文章を毎日読むことによって、自然に考える力が身につきます。また、毎日同じことを続けるという習慣がつくと、それはほかの勉強の習慣にもよい影響を及ぼします。

第三は、毎週、作文を書くことによって、文章を書くことが苦にならなくなるということです。大学入試でも会社の就職試験でも、小論文の課題を出すところが増えています。しかし、文章を書く力は一朝一夕には身につけません。言葉の森で勉強をしている子供たちは、高校生になるころには自然に大学入試の小論文に対応する実力を身につけています。

先に進まずにその時期を味わう

作文の学習で大事なことは、必要以上に先に進ませずにその時期の課題をたっぷりこなすということです。

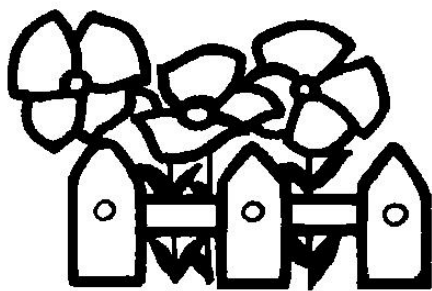
子供は吸収力があるので、知的な勉強を先に進ませようとするれば、驚くほどの成果を見せることがあります。しかし、能力の中には、先に進ませた方がよいものも、先に進ませない方がよいものもあります。

漢字の読みなどはある程度先に進ませた方が、ほかの勉強にもプラスになりますが、作文を書く力については、その年齢の課題をたっぷり味わうという勉強の仕方が必要です。小学校低学年で、できごとをくわしく書くという練習をしてからでないと、高学年の、できごとを説明的に簡略に書くというはできません。もし、ものごとをありのままにくわしく書く時期を短期間で終わらせて、その先の課題である、ものごとを一般化して書くという課題に早め取り組もう

とすれば、中身のない言葉だけの作文になってしまうおそれがあります。

作文の学習の山は、年齢に応じていくつかあります。大きな山の一つは小学2年生のころです。無邪気に長く書いていた子がこの時期から急に長く書けなくなる場合があります。それは停滞ではなく、新しい段階に進む前の模索の時期です。読んでいた本の文章をそのまま思い出すように書いていた子が、あらためて自分の言葉として文章を書こうとするために、長く書けなくなるのです。もう一つの大きな山は小学6年生です。できごと中心の作文を書いていた子が、ものごとをより大きくとらえて書こうという気持ちを持つようになります。しかし、読める語彙に比べて書ける語彙の範囲はずっと狭いので、書きたいことが書けないという時期が中学2年生のころまで続きます。

作文の指導をするときには、その作文を見るだけでなく、その作文がどの時期に書かれたものかを見ていく必要があります。



本物の読解力・表現力をつける

国語の勉強法

受験における国語力

中学受験の合否を左右する第一の教科は算数で、国語はその次の教科です。

塾の偏差値を見るとどの教科も大事な教科のように見えてきますが、受験の合否を決めるのは偏差値の合計ではなく、得点の合計です。すると、算数のように得点の差が大きい教科でどれだけ点数を取れるかということが重要になってきます。

この事情は、高校受験でも同様です。中学受験でも高校受験でも、算数・数学の得意な生徒は、実力以上の成績を収める傾向があります。

このため、学習塾の多くは、算数・数学の指導に最も力を入れています。その次に力を入れているのが、知識の量によってカバーできる理科・社会の指導です。国語の指導は、時間がかかるわりに効果が薄いので、どの学習塾でもあまり力を入れていません。

国語力はなぜ必要か——受験前——

国語力は、机の上での勉強よりも、生活習慣の中で育つ勉強という面が強くなります。例えば幼児期に読み聞かせをたっぷりされて育った子は、小学校に上がってから文章を速く楽に書けるようになる傾向があります。小学校中学年の時期に、軽い読み物も含めていろいろなジャンルの読書をした子は、高学年になってから速読力がつくようになります。両親と対話をする習慣がある子は、深い感想が書けるようになります。また、漫画などの軽い本を読みすぎる子は、国語力が低下する傾向があります。

国語の勉強というと、すぐに漢字の書き取りを思い浮かべる人も多くいますが、漢字力の差は学年が進むにつれてなくなります。逆に学年が上がるにつれて差が開いていく本当の国語力は、読解力と表現力です。

読解力と表現力を中心とした国語力をつけるためには、生活習慣としてできるような国語の勉強をしていくことが必要です。(後述)

国語力は、他の教科の勉強と異なり、いったん力がついてしまうとずっとその力を維持できます。国語に自信のある子は、受験前の追い込みの時期に国語の勉強をする必要がないので、他の教科の勉強に集中できるというメリットがあります。

国語力はなぜ必要か——受験後——

国語の成績がよくて合格した生徒は、入学後も成績が伸びると言われています。それは、国語力が単に一つの教科の学力ではなく、物事を理解し整理する思考力そのものと密接に結びついているからです。国語力のある人は、学校を卒業し実社会に出てからも活躍する幅が広がります。情勢を読み取り、多くの人の考えを整理し、自分の意見を説得力ある形で述べるという力は、国語力そのものだからです。

国語力が必要なのは、文系の人だけではありません。理系の人でも、芸術系の人でも、経営に携わる人でも、社会で活躍する多くの人は、国語力に優れています。その場合の国語力とは、文法や文学史の知識ではなく、読解力と表現力を中心とした本当の国語の力です。

これまでの勉強法では国語力はつかない

国語の勉強というと、問題集を解き、できなかったところの解説を先生に聞くというやり方がほとんどです。算数・数学の勉強では、このやり方は有効です。算数・数学の場合は、できなかった問題だけを何度も繰り返し解く中で、問題を解く力がついていくからです。しかし、国語の勉強は、こういうやり方では力がつきません。というのは、国語の問題でできなかったものは、解法がわからなくてできなかったのではなく、実力がなくてできなかったのだからです。

また、問題集を解く勉強法には時間がかかりすぎるという欠点があります。数ページの国語問題集を解くだけでもすぐに1時間近くかかります。しかし、その時間のうち、解けた問題はもともと何もしなくても解けた問題ですから、意味のある勉強にはなっていません。解けなかった問題は実力がなくて解けなかった問題ですから、解説を聞いてもやはり解けるようにはならず、これも意味のある勉強にはなりません。問題集を解いて解説を聞く勉強は、勉強している外観だけの勉強なのです。

家庭でできる本物の国語勉強法(高学年)

国語の勉強の基本は、読む力をつけることにあります。読む力をつけるためには、家庭で毎日、受験問題と同じレベルの文章を読む練習をすることが最も効果的です。毎日続けるためには、できるだけ単純な勉強法で、親が準備をしたり手助けをしたりする必要がないものにすることが大切です。

(1) 1200字程度の長文を音読する。

(受験問題と同じレベルのもの。同じ文章を日を置いて4回以上繰り返す)

(2) その中の100字程度の文章を暗唱できるようにする。

(3) 問題集の問題文を読書がわりに読む。

(問題は解かずに問題文を読むだけ。1冊の問題集で4回以上繰り返す)

このほかに、親の準備や手助けが可能であれば、長文を要約し簡単な感想を書く練習をします。感想を書くために読もうとすると、読み方が深まります。

読書の習慣を絶やさずに

小学校低中学年のときに読書好きだった子が、高学年の時期になると受験勉強に追われて読書から一時遠ざかります。しかし、ここで、あっさりと読書の習慣を絶やしてしまうと、その後中学生や高校生になってからも読書の習慣が復活せず、たとえ復活しても軽い読み物しか読まなくなってしまうという結果になりがちです。

読書は、勉強のためばかりでなく、子供の将来の人生を豊かにするためにも大切なものです。特に、小学校高学年から中学生にかけては、これまでの物語中心の読書から説明文や意見文の読書へジャンルが広がっていく時期です。本格的に読む時間は取れなくても、毎日必ず一定の読書時間は確保していきましょう。

中学に合格すると、部活や定期テストで更に忙しくなるので、どの子もますます読書から遠ざかるようになります。このときにも、小学校高学年のときに読書の習慣を絶やさなかった子は、読書の習慣を維持し発展させることができます。

親は目先の受験だけでなく、子供の将来を考えて長期的な視野で勉強を見ていく必要があります。

国語力・読解力をつける

作文の勉強法

これから必要になる作文力

大学入試では、小論文試験を課す大学・学部が引き続き増えています。就職試験でも、多くの会社の入社試験で、作文・小論文の課題が出されるようになりました。文章を書く機会は、インターネットの時代になってますます広がっています。

文章力は、単に文章に表われた表現力という意味だけがあるのではありません。「文は人なり」という言葉があるように、文章の中に、その人の知識の広さや深さ、考える力、感じ方などが総合的に表われてきます。

私たちは、この文章力を育てることによって、子供たちの個性、感受性、思考力を豊かに伸ばしていきたいと考えています。

小学生のうちから書くことが好きになる

作文に対する好き嫌いは、小学校中学年のころから現われ、小学校高学年でほぼ定着してきます。国語や作文の勉強は、他の教科の勉強とは性格が異なっています。国語や作文は、教科書を通して学校の授業の中だけで教わるものではありません。国語力・作文力のほとんどは、家庭での読み、書き、話す習慣の中で形成されていくものです。

したがって、作文の勉強も、そういう生活習慣をいかに形成するかというところに力点が置かれます。具体的には、毎日、ある程度の難しさを持った文章を読むこと、できるだけ文章を書く機会を作ること、周りの大人が、その文章のいいところをほめてあげることです。

また、小学生のときに必要な作文力と、中学生・高校生になってから必要な作文力とは自ずから違います。ほめるだけでなく、作文の水準を年齢に応じて引き上げていくことも必要です。

国語力・読解力も伸びる

作文の勉強が進んでいくと、初めは身近な生活文から始まった作文が、やがて感想文、説明文、意見文へと進歩し、大学入試の小論文へと発展していきます。その進歩に応じて、書く力だけでなく、読む力や考える力も成長していきます。

学校や塾で行われている国語の勉強では、実際にはあまり国語の力はつきません。それは、文章を読み取る際の技術的なことを教えすぎるからです。文章は、読解の問題として読むよりも、その文章に対して自分なりの感想を書こうと思って読むときに、最も深く読み取ることができます。

この感想文や小論文の指導を、子供が楽にできるようなわかりやすい手順で教えることが、国語力や読解力を伸ばす指導につながります。

家庭でできる作文の勉強

低学年のうちは、書くよりも読むことに力を入れていく時期です。作文を書く練習をする必要はありますが、作文そのものを指導するのではなく、読む力をつけることによって作文力を自然に向上させるように工夫することが大切です。これは、どの学年にも共通する原則です。具体的には、良質の文章を繰り返し読むことによって文章のリズムや語彙を身につけるようにしていきます。

中学年は読書力も作文力も伸びる時期です。この時期にいろいろなジャンルの本を多読しておく、高学年になって速読力がついてきます。また長い文章を書く力をつけておくのもこの時期です。

高学年は、物事を大きくとらえて感想を書くことができる時期です。受験の問題に出てくるような難しい文章を読ませて感想文を書く練習をすると、読む力も書く力も向上します。

中学生は、読む力の方が書く力よりも早く成長するために、作文を書くことがだれでも多かれ少なかれ苦手になる時期です。語彙力がつく高校生までは、周囲が温かく見守ってあげることが必要です。

高校生になると、意見文を書く力が安定してきます。国語力には学年の差はあまりないので、力のある生徒には大学入試問題にも取り組ませていけます。また、古今の名著に触れさせ、思考力に厚みをつけるのもこの時期です。

英語力をつけるために

基盤となるのは国語力

大学入試の英語に必要なのは国語の読解力

近年、英語力の必要性が大きくさげられるようになってきました。それは、一つには、日本社会の国際化に伴い、英語を実際の道具として使える能力が要求されるようになってきたためです。もう一つには、大学受験の可否を左右する主要な教科が引き続き英語であるという事情のためです。

しかし、ここで考えなければならないのは、英語を学ぶことそのものではなく、自分の人生の中でどういう学力として英語を学ぶかという言わば英語の位置づけです。英語を学ぶ目的を考えることによって、初めて英語を学ぶ方法も決まってくるからです。

母語の根に応じて外国語学習の花が開く

日本語ができることによって英語の力も伸びるという相互関係は、大学入試以外の分野にもあてはまります。

バイリンガルのニュースキャスターなどを見ていると、英語を勉強すればだれでもそのように英語を使って自由に活躍できるかのような錯覚を持つことがあります。しかし、日本語で社会情勢を論じる力がなければ、英語力だけがついてもやはり英語で社会情勢を論じることはできません。日本語で日本の本を読んで感動できる力があって初めて、英語で海外の本を読んで感動することができます。日本語の豊かさに応じて、外国語の学習も豊かになるのです。英語の学習を志す人は、この当然のことを折りにふれて確認しておく必要があります。

海外から見た日本の国際化

国際化という言葉は、日本独特のものです。日本以外のアジアの国々は、欧米圏の書物を自国語に翻訳するバックボーンがなかったために、早くから英語を公用語として習得する道を選択しました。その結果、アジア諸国の知識人は英語を実践的な教養として身につけています。これは、日本人が英語を受験勉強の一部としてしか身につけていない状況とは大きく異なっています。日本の知識人に、使える英語に対するコンプレックスが必要以上に大きいのは、このことが一つの理由になっています。

また、欧米にはもともと国際化という考え方ありません。地続きに国境がある国では、自分たちの国に生きることがそのまま国際社会で生きることと同義です。日本だけが、国際化を必要以上に意識し、欧米の流儀に合わせるものが国際化だと勘違いしているのです。

今日の国際社会では、英語を流暢に話せることがそのまま尊敬を得られる道でないことは当然です。立場を変えて考えてみるとわかるように、外国人が日本語を流暢に話せるからといって私たちがそれだけでその外国人を尊敬するものではありません。大事なことは、人間の中身であって、語学はその中身を表わすための道具です。

海外の人たちが日本に求めているものもまた、日本人の英語力ではなく日本人のオリジナリティなのです。

早期からの英語教育の必要性

しかし、日本における英語の早期教育は今後ますます必要になってきます。インターネットの時代では、子供たちはパソコンを前にすると否応もなく国際社会に投げ出されます。中学や高校での英語の勉強が一通り終わってからでないと、英語は使えないというのでは遅すぎます。

これまでの日本では、小学4年生でローマ字を習い、中学1年生でアルファベットを習うという流れが普通でしたが、これを小学校1年生のうちから、ひらがな・カタカナ・アルファベットを同時に習い、日本語と同じように英語を日常語の一つとして使う練習をしていく体制に切りかえる必要があります。既に家庭の中では、家電製品に「ON」「OFF」「VOLUME」などの英語の単語が、だれでも読めて当然であるかのように使われています。英語は中学生になってから、という考えでは遅すぎるのです。

興味関心の入口の肥大化

しかし、ここで考えなければならないのは、何のために英語を学ぶかということです。英語を学習する目的は、将来英語を道具として自由に読み書きできるようにし、自分の生活と人生を豊かにするためです。そういう英語力を身につけるためには、学習に伴う苦労も当然あります。どのような習い事も、単調な基礎学習の土台の上に、応用学習があり、やがてその学習の成果を自由に駆使できる段階がやってきます。

ところが、今日の早期英語教育の多くは、楽しい応用学習を取り上げて子供たちの興味を引くところまではできますが、その後の本格的な学習に続けていく展望がなかなかないのです。

小学校の早い時期に英語の学習を始めた子が、その早期の英語力の効果を維持できるのは中学1年生までとされています。英語の勉強が学校で本格的に始まるようになると、早めに英語の勉強を始めた子と中学に入ってから英語の勉強を始めた子の差は次第になくなっていきます。

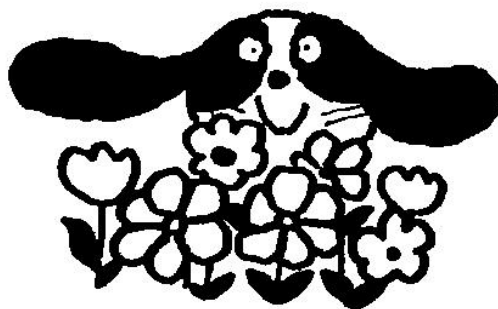
逆に言えば、そのような楽しい導入部分中心の英語教育では、早めに取り組んでも学習をした意味はあまりありません。英語の早期教育は、今後必ず必要になってきますが、そのためには、本物の英語教育を目指す必要があります。

そして、本物の英語教育のいちばん確実な土台となっているものは、本物の日本語の力なのです。

日本語を最優先に英語の早期教育を

英語教育を考える際にまず大事なことは、その年齢に応じた日本語力を確実に身につけておくことです。できれば、その年齢よりも上の日本語力のある方が、英語の学習もスムーズに進みます。

そして、英語の学習は、今流行っている会話中心の学習よりも、将来英語で読み書きできる力をつけることを中心に取り組んでいく必要があります。



読書力をつける

読む力と書く力を育てる作文の勉強

読書力はあらゆる学力の基礎

読書をしたことのない子は、今の日本ではひとりもいないと言ってもいいでしょう。どの子も小さいころ、お母さんから絵本を読んでもらったり、自分で本を読んだりした経験があります。

そのため、読書というものはだれでもできるもので、それが子供たちの学力の差になっているとは考えにくいものです。しかし、小学校の低学年の時期から既に、読書力については予想以上に大きな差が生まれています。結果が表面に出やすい漢字の書き取りや計算の練習は、成績が悪ければすぐに力を入れることができます。しかし、読書力については、大きな差があってもそれが自覚されないまま見過ごされてしまう場合がほとんどです。

ところが、この読書力の差は、学年が上がるにつれて、子供たちの学力の大きな差として表われてきます。読む力のある子は、国語だけでなく、理科でも社会でも、文章を読むだけで内容を吸収していきます。

しかも、この読む力は、文章を読むことだけにとどまりません。読書力は、物事の相互の関連を、理由、原因、方法、心の動きなどの立体的な構造として読み取る力にもつながっています。

読書力は、あらゆる学力の基礎となっていると言っても言い過ぎではありません。

本を読まない中学生・高校生・大学生

幼児期から小学校低中学年にかけて豊かな読書週間を持っていた子でも、中学受験の時期になると、それまでの読書の習慣が途切れてしまうケースがかなりあります。

小学校高学年から中学生にかけては、読書の質が変わる時期にあたるので、小学校高学年で読書から遠ざかると、中学生でどういった本を読んでいたかわからずに、そのまま読書離れが続いてしまう傾向があります。すると、高校生・大学生となるにしたがって、更に読書離れが定着していきます。

読書力が伸びないから読書の楽しさがわからない、読書が楽しく思えないから読書をしないという循環が、大学生以降もずっと続いてしまうのです。

読書を阻害する環境

「私が子供のころは、自然に本を読んだのに」と嘆かれるお母さんがよくいます。子供のころ自然に読書好きになったお母さんほど、読書とは強制されてするものではなくだれでも自然に読むようになるものだ、という考えを持っています。

しかし、今の子供たちをめぐる環境は、昔とは全く違います。最も大きな違いは、読書以外の魅力的な時間つぶしがたっぷりあるということです。テレビゲーム、ビデオ、インターネット、携帯電話などは、お母さんやお父さんが子供のころにはなかったものです。

これらの環境に抗して読書生活を続けることは、子供の力だけではできません。親や学校や社会が協力して、子供の読書環境を確保してあげなければならぬのです。ところが、そういう体制はまだほとんどできていません。

そこで、少なくとも家庭で子供たちの読書環境を作っていくことが必要になります。

小学校低学年から読書を生活習慣に位置づける

小学校低学年の時期は、書店にも図書館にも読む本がたくさんあります。また、テレビゲームやインターネットなどの環境も、親の力でコントロールすることができます。

この時期は、読書を毎日の生活習慣に位置づけるということを優先して取り組んでいきましょう。そのためには、読書の時間を毎日必ず確保することが必要になります。

習慣というものは、日々欠かさずに続けていくことで定着します。何かの習い事があって遅くなる日は読書をしないというようなことがあると、習慣づけは難しくなります。読書習慣は、どの勉強や習い事よりも優先させるつもりで取り組む必要があります。そのためには、読書時間を夕方だけでなく、朝食前に確保するのも一つの方法です。

小学校中学年は多読によって速度力を身につける

小学校中学年の時期は、読書のジャンルが広がり、読書量も増える時期です。この時期に読む本は、書店や図書館でも充実しています。ときどき、「どういう本を読ませたらいいでしょうか」という質問を受けますが、小学校低中学年の時期の読書選びは、困ることはありません。書店に行けば、フォア文庫、青い鳥文庫、岩波少年文庫など、出版社がこれまでに人気のあった本を再編集し

て出版しているシリーズが多数あります。この中で、子供が興味を持ちそうな本をどんどん読ませてあげればいいのです。

本というものは、最初は難しくつまらなそうに見えても、読み進むにつれて読む力がついていき、最後には面白くなってくるという場合がほとんどです。特に、小学校中学年のころまでは、本の内容に対する好みの個人差はほとんどありません。「子供が興味を持って読んでくれるような本を」と考えるよりも、何しろたくさんの本を読ませて読む力をつけるというのが、この時期の課題です。

小学校高学年からは難読に挑戦

小学校高学年は、中学受験とぶつかるために、読書習慣が途切れやすい時期です。この時期は、これまでと同じように多読を続けていくことは時間的にもできません。また、読書力は、当面の受験のための国語力とは部分的にしか結びつきません。中学受験の国語力として要求される能力は、普通の読書力ではなく、難しい文章を読む力（難読力）だからです。

高学年の読書は、限られた時間の中で、量よりも質を考えて読む力をつけるということになります。読書をする時間が取れない場合は、入試用の国語の問題集を読書代わりに読むというようなことも必要になります。

受験に迫られている時期も、わずかずつでも読書の習慣を継続していくというのが、この時期の課題になります。細々とでも読書習慣を維持していくことによって、中学生以降の読書生活の継続が可能になるのです。

中学生は親と同じ本を

中学生になると、親が勉強のアドバイスをすることが難しくなります。そのため、読書についても自然に本人まかせになってしまいがちです。しかし、この時期に読書をしない習慣がつくと、そのあと読書習慣を復活させることはできません。

しかし、中学生のころに、子供たちが読むのにふさわしい本は、書店にはほとんどありません。売れないから書店に並ばない、書店にないから読まないという悪循環が、日本の中学生・高校生の読書環境となっています。

また、中学生になると、学校も読書指導をしなくなります。部活動や定期テストに追われ、書店に行ってもどのような本を選んでいいのかかわからず、先生も読書のアドバイスをしないとすれば、中学生の読書離れは当然の結果と言ってもいいでしょう。

そこで大切になるのは、やはり家庭の教育力です。お父さんやお母さんが中学生のころに読んで感動したような本の多くは、既に絶版になっています。似たような本を説明文のジャンルから選ぶとすれば、現代では、「岩波ジュニア新書」「ちくま少年図書館シリーズ」などになるでしょう。これらの中学生・高校生向けの説明文の本とともに、お父さんやお母さんが現在読んで感動した本をすすめるというのが、中学生の読書選びの方向になります。

このような方向づけがないと、中学生の読書は、たとえ読書好きの子であっても、小学校の延長で小説を読むレベルからなかなか抜け出せません。小説を読むこと自体はマイナスではありませんが、それが読書生活のすべてになってしまい、説明文意見文の本を読まないとなると、読書力は成長しません。

高校生・大学生は古典を

高校生・大学生に必要な読書は、ひとことで言えば古典です。日本の文学に限らず、世界中の古今の名著と呼ばれるものを読んでおくのが、この時期の課題です。高校生時代の歴史や倫理や政治経済の授業で書名だけ聞いたような本を、書名の暗記だけに終わらせずに実際に読んでいくことが、その後の人生のバックボーンとなります。

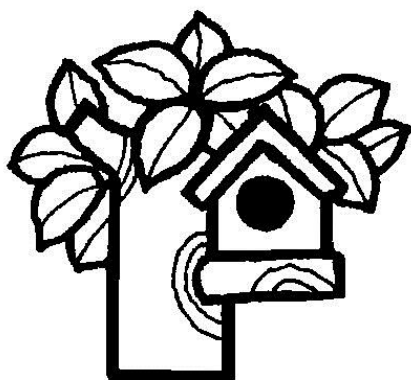
また、大学入試の小論文の勉強の際に読むようにすすめられた参考図書などは、良書を選ぶ上で参考になります。

現代の日本では、どの分野にも、わかりやすく書かれた入門書や概論書が用意されています。しかし、わかりやすい入門書を何冊も読むよりも、その分野の原典となる本を一冊読むほうが、得るものは比較にならないほど大きいのです。ところが、こういう読書一般のアドバイスしてくれる人は、高校生や大学生の周りにはほとんどいません。自分自身で自覚して読書を進めていくことが、高校生や大学生にとっては必要になります。

読書と作文を結びつけた感想文の勉強

言葉の森の作文指導は、読む練習と書く練習が密接に結びついています。読む力をつけることによって書く力が伸び、書く力をつけることによって更に深く読むことができるというのが、言葉の森の教材の特徴です。

私たちは、受験に合格するためだけの読書指導や作文指導ではなく、子供たちの将来の人生に役立つような読書・作文指導をしていきたいと思っています。そのためにも、より多くの人々が、読書や作文を、子供たちの勉強の重要な一部として認識してくれるように願っています。



発行者 中 根 克 明
発行所 言 葉 の 森

〒234-0054 横浜市港南区港南台 4-3-1

Tel 045-830-1177

Fax 045-832-1466

Mail mori@mori7.com

<http://www.mori7.com/>